



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「朱夏の女優黒木瞳のインド ⑥」

次の撮影地はジャイプル（勝利の街）である。ピンク・シティとも呼ばれるが“花街”ではない。ピンクというより、赤砂岩を使用しているので“レンガ色”の街である。

歴史的には、1727年（江戸時代）ラージプートの藩王マハーラージャ・サワイ・ジャイ・シン 2世によって建設された街である。藩王は軍人でもあり、学者でもあった。建築設計や占星術にもたけていて藩王自身がこの街の設計にたずさわった。

ラージャスターン州は砂漠とラクダの地で、その入り口がジャイプルである。当然ながら乾期には水が不足する。朝、塩辛いコーヒーや紅茶を飲んだことがある。雪のような塩が浮き出た土地もある。農耕ができないので通商や出稼ぎで稼ぐことになる。悪名高いマルワリは、稼がないと故郷に帰れない家訓がある、と聞いたことがある。

わが輩は国際協力銀行のプロジェクト（水に関するシンポジウム）に加わったことがある。ジャイプル市内の上水道、下水道を視察したが、一つ面白いことを知った。

道路や路地を注意して歩くと、13cmほどの“マンホールの蓋”のようなものがある。この蓋の下に、地中深くパイプが埋め込まれている。その上部にモーターが取り付けられてあり、地下水をチョロチョロと吸い上げる仕組みになっている。街中のパイプから水を少しずつ集めて水道局に送り、各家庭に配水するのである。なんとも気の長いシステムだが、いかに水が大切かを理解できた。

水問題は大変だが、とにかく明るい街である。だが風の宮殿での撮影は大変だった。われもわれもとカメラの前に集まってくる蠅のような連中を払いのけるのに汗だくだく。

（これじゃ、映画にならないよ）

アンベール城では印象的な場面があった、と言っても演技ではない。城の下に民家が並んでいる。観光客が余り行かない場所である。監督と黒木が撮影場所を求めて路地に入っていった。そこに、一人の少女が現れた。無表情で黒木をただ見つめているだけであった。その少女を見た黒木の瞳から美しい涙がひとすじ流れた。彼女はいったい何に感動したのであろうか。

監督が興奮気味にわが輩に知らせてくれた。女優というものはなんとセンシティブなものかと心に残った。

ロケ隊は超高級なランバーク・パレス・ホテルに宿泊した。宮殿をホテルに改築したものである。マハーラージャ（王）の部屋、王族が泳いだプール、庭園など素晴らしい建築である。レストランも天井が

高く豪華な装飾で彩られている。

もちろんインド料理も最高だ。だれでも食が進む。黒木も美味しいといって盛んに食べていた。しかし、これがあとで問題となった。嬉しい事件ともいえる。

次の難問は、1月26日の共和国記念日の撮影である。

実は今回の撮影は、主に共和国記念日のパレードの撮影ということで許可が下りた。パレードは国会議事堂からインド門の間で行われる。大統領など政界首脳が列席するので警戒は厳重である。もちろんカメラマンも事前に申請し特別な許可書を取得しなければならない。ところが、カメラマンは観光ビザで入国していた。苦肉の策でプロデューサーが撮影することになった。

そのためにわが輩はプロデューサーと一日早くデリーに帰ることになった。深夜に車をぶっ飛ばすのだが、プロデューサーが叫んだ。

「この運転手は居眠りをしているぞ」

「こら！居眠りするな！」

「ダンナ様よ、ノー・プロブレム（問題ない）」

（あるよ。われらがこのまま天国に行ったらどうするのだ。運転手よ！）

ところが、叱り飛ばしていたわが輩が昼間の疲れでコクリコクリと居眠り状態になった。インドでは夜間の交通事故が圧倒的に多い。街灯もない、トラックの運ちゃんも飲酒運転をする。これで交通事故がおきないなら奇跡だ。

プロデューサーが窓を開けたり運転手に注意を与えたりして、何とかデリーにたどり着いた。わが輩は、途中から恐怖心が抜けた。眠気が恐れを取り除いたのである。

無事についたのは、プロデューサーさまのお蔭です。感謝。